

J.S.バッハ（岡本拓也編）：カンタータ第29番《神よ、われら汝に感謝す》よりシンフォニア

カンタータ第29番《神よ、われら汝に感謝す》は、1731年のライプツィヒ市参事会員交代式のために作曲された祝祭的な教会カンタータ。その冒頭に置かれた「シンフォニア」は、バッハ自身の「無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第3番」のプレリュードを管弦楽曲に編曲したもの。原曲のヴァイオリンによる無窮動的な16分音符の旋律を、編曲版ではオブリガート・オルガンが担当し、高度な技術を要する協奏曲風の楽曲に仕立てられている。

パガニーニ：協奏的ソナタ イ長調

ニコロ・パガニーニの「協奏的ソナタ イ長調」は、ギターとヴァイオリンのための二重奏曲。パガニーニはヴァイオリンのヴァーチュオーゾとして知られるが、優れたギタリストでもあった。本曲は、2つの楽器が対等にメロディを掛け合う「協奏的」な楽想を有している。

全3楽章から構成される。「第1楽章：Allegro spiritoso」は、快活で華やかなソナタ形式。ギターとヴァイオリンが交互に主題を奏でる。「第2楽章：Adagio assai espressivo」は、叙情的で甘美な緩徐楽章。パガニーニらしい歌心に溢れている。「第3楽章：Rondeau. Allegretto con brio」は、軽快で躍動感のあるロンド形式。フィナーレにふさわしい華やかな応酬が聴きどころ。

バルトーク（岡本拓也編）：ルーマニア民俗舞曲

バルトークが1915年に作曲した「ルーマニア民俗舞曲」は、トランシルヴァニア地方の民謡をもとにした全6曲からなる組曲。もともとはピアノ独奏曲だったが、バルトーク自身による管弦楽版をはじめ、ヴァイオリン編曲版なども広く親しまれている。組曲は、第1曲「棒踊り」、第2曲「帶踊り」、第3曲「踏み踊り」、第4曲「角笛の踊り」、第5曲「ルーマニア風ポルカ」、第6曲「速い踊り」から構成される。

S.L.ヴァイス：

「組曲 第1番」より プレリュード

「組曲 第4番」より アルマンド

「組曲 第14番」より パッサカリア

シルヴィウス・レオポルト・ヴァイス（1687-1750）は、バロック時代を代表するリュート奏者兼作曲家。今回演奏される一連の作品は「組曲（ソナタ）」と命名され、アルマンド、クーラント、サラバンド、ジーグといった舞曲を中心に構成されている。「組曲 第1番」は、ヴァイスの初期から中期のスタイルを示す、優雅で流麗な旋律が特徴。「組曲 第4番」は、リュートの響きを最大限に活かした華やかな曲。「組曲 第14番」は、哀愁を帯びた重厚な響きを持ち、多くのリュート奏者やギタリストに愛奏されている。

無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第2番 より シャコンヌ

シャコンヌは「無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第2番」の終楽章（第5楽章）に置かれている。シャコンヌは、3拍子系の古い舞曲を出自とし、バッハの無伴奏作品のなかでも屈指の名品であり、単独で取り上げられる機会も多い。冒頭で呈示される8小節の主題が、4小節ずつ前半・後半に分かれて同じ和声進行を繰り返し、さらにその8小節の主題が30回にわたって変奏される。舞曲という枠組みをはるかに超えた『音楽による建築物』ともいえる世界が、一挺のヴァイオリンによって形づくられていく。

ピアソラ：《タンゴの歴史》

ピアソラが1986年に発表したフルートとギターのための組曲。1900年代から1960年代までのタンゴの変遷が4つの音楽で綴られる。まず「Bordel 1900（売春宿 1900年）」では、初期の活気に満ちた、明るいアップテンポのタンゴが奏される。ゆったりとした「Café 1930（カフェ 1930年）」では、「踊るための音楽」から「聴くための音楽」への変化が描かれる。「Nightclub 1960（ナイトクラブ 1960年）」では、ブルージュ音楽の要素が混ざり、現代的でリズミカルな「ヌエヴォ・タンゴ」へと進化する。終楽章の「Concert d'aujourd'hui（現代のコンサート）」では、前衛的で複雑な現代音楽としてのタンゴが完成する。